先人たちの知恵と努力が詰まった和紙、「保田紙（やすだがみ）」をご存じですか？

今からおよそ350年前、紀州徳川の初代藩主徳川頼宣（よりのぶ）公のお国入り後、領内の重要な産物の一つになる紙の製造を、山保田（やまやすだ）（現在の粟生区を除く旧清水町）の大庄屋だった笠松左太夫（かさまつさたゆう）に命じました。依頼を受けた左太夫は、製紙技術を教わりに各地に出向くものの門前払い。そこで左太夫は「嫁取り作戦」を決行します。美男3人を商人に仕立て、紙漉（す）きの盛んな地域へ派遣。その後、3人は紙の漉けるお嫁さんを連れて帰ってきます。その製紙技術を生かし、気候や風土に合わせて完成させた紙が、保田紙の始まりといわれています。

そんな面白い歴史を持つ保田紙ですが、「見たことがない」「触れ

秋の夜長に行灯の光
「保田紙」という伝統

昨年の「第4回しみず保田紙行灯アート展」の様子。
秋の夜を行灯の光が優しく照らします。